

書評 星新一著『ボッコちゃん』改版 (新潮社, 1987) (新潮文庫 ほ-4-1)

法科大学院 法務研究科 法務専攻 根本真弥

「忙しいから本を読む時間なんてないさ」。

日々教科書や参考書しか開かない大学生であっても、こんな言い訳が言えなくなる本だ。

星新一は、言わずもがな、日本随一の「ショートショート」の名手である。そして、数ある彼の作品集の中でも、本書は「ミステリー的なもの、SF 的… (中略) …寓話があったもの、童話めいたものもある (著者後書)」、広大な宇宙のような彼の作品群の中から、特別強く光る星々を掬い取ったような名作揃いの自選集である。小・中学生向け教材となっていた『おーいでてこーい』『おみやげ』から、独特の毒を含んだラストを見せる『人類愛』『生活維持省』まで、本書は特に扱うテーマが幅広く、またシニカルなラストも痛快なものばかりである。

一編につき文庫サイズの 5 頁ほどで完結する作品群であるから細かい抜粋はあえて差し控えるが、そのたった 5 頁で読者を取りこにする理由が 3 点見出せる。“ショートな主人公” “ショートな装飾” “ショートなオチ” である。

小説において主人公は、作品の世界観を追体験するための感情移入する器となるため、その存在は特徴的なものであることが多い。しかし、本書の主人公達は、「エス氏」「エヌ博士」といったイニシャルだけ、単に「博士」「宇宙人」といった一般的な表現で表される、無個性的な存在である。といっても、それによって読者の感情移入が妨げられることはない。なぜなら、作品の「世界観」自体がそれぞれ強烈な個性を持ち、この世界はどのような世界か、という点に興味を惹かせて読者を取り込んでしまうのである。そして、無個性な主人公というありふれた存在をものさしに世界の不可思議さを実感し、概念や価値観や常識が 180 度転換した世界に「感情移入」していく。言ってみれば、5 頁で展開される世界そのものが主人公なのだ。

それでいて、その世界観の説明は、過度な修飾語や情緒的表現はなく、必要最小限の短文で構成されている。星新一は、作品のアイデアが浮かぶとコースターの裏のような場所でも構わず書きつけ、恐ろしいほど大量の推敲を重ねていたという。それゆえ、余計な部分を削ぎ落とし、中心となるアイデアそのものの味をいかした究極の一品料理が完成している。簡略な叙述ではあるが、軽妙なユーモアを軽くまじえた独特の筆致によって、飽きることを許さずにオチまで読ませてしまうのである。

そのオチに要される分量を平均してみたが、なんと約 10 行、全体の 5 % 程の文章で、読者はこれまでの価値観をひっくり返される強烈な読後感を味わう。独創的なユーモアの質については今更言うに及ばないが、彼はその表現を、世界が崩壊する萌芽、氷山の一角を示しただけで、物語を閉めてしまう。これにより、読者は各々その後の展開を想像せざるを得なくなり、たった 5 頁の宇宙は、読者の脳内において無限に膨張していくのである。

本書を開くことで、時間も金もかけることなく、私達は宇宙旅行を楽しめるのだ。